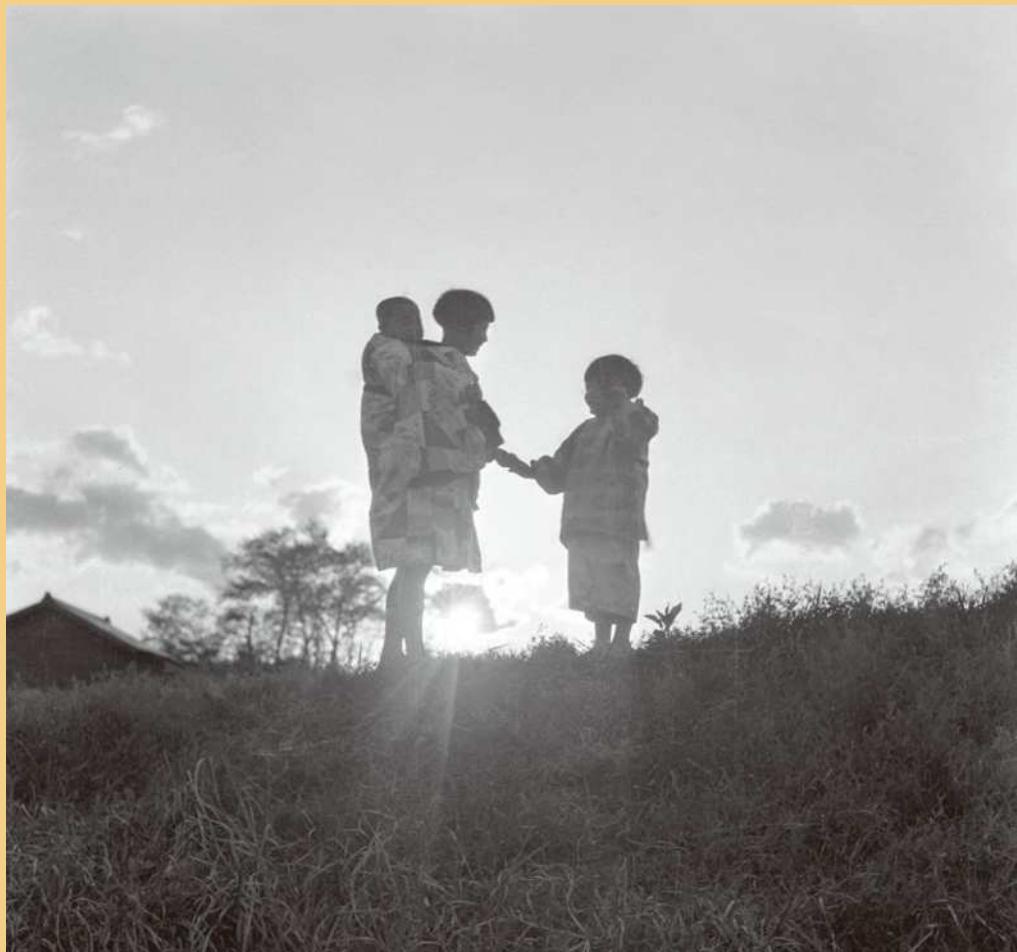


岐阜市歴史博物館

博物館だより

No.103 2019.10



近藤龍夫氏撮影(岐阜市歴史博物館蔵)

企画展「ちょっと昔の道具たち」

平成8年度にはじまった企画展「ちょっと昔の道具たち」は、今年度で24回目を迎えます。

本展は、小学校の社会科単元と連動した展示であり、市内・市外から多くの子どもたちが来館して、生活の違いや変化、昔の人々の生活の知恵を学んでいます。また、年配の来館者の方は、“なつかしい”道具やまちなみから、自らの体験を思い起こされるようです。

そのほか会場では、岐阜市のうつりかわりや市内の写真も紹介しています。ぜひ“ちょっと昔”にタイムスリップして、当時の人びとの暮らしを想像しながら展覧会をお楽しみください。

(令和2年3月15日(日)まで開催)

企画展

ちょっと昔の道具たち

2019.12.17(火)～2020.3.15(日)

今年で24回目を迎える展覧会。本展は、小学校3年生の社会科単元「古い道具とむかしのくらし」と連携し、今と昔の生活の違いや変化、昔の人々の生活の知恵を紹介します。また、「具体物を通して」学習する場を提供し、体験やジオラマ方式の展示形式で、「見て・聞いて・触れて楽しく」学ぶことを目的としています。また会場内には、20代～80代と、さまざまな世代のものじり博士が各コーナーで解説や体験補助を行っており、毎年ご好評をいただいているます。



道具体験の様子

展示コーナーでは、「道具のうつりかわり」「まちかど」「家のなか」の3つのコーナーを設け、いずれも児童の生活に関連した場面を設定し、道具の変化を紹介しています。

「家のなか」は80年くらい前（昭和初期）、「まちかど」は60～50年くらい前（昭和30年代～40年代）の時代設定とし、ジオラマ形式に資料を展示することで、当時の様子が理解しやすいよう配慮しています。



ジオラマ展示の様子（まちかどコーナー）



ジオラマ展示の様子（家のなかコーナー）

また本展では、展示内容や見学方法等について、岐阜市小学校社会科研究会の先生方と開催する博学連携委員会において協議するとともに、来館者アンケートも参考にしながら毎年見直しを行っています。今年度は、令和2年度(2020年度)からの小学校教育指導要領と教科書の改訂に向けて、様々な道具の変遷がたどれる「道具のうつりかわり」コーナーを拡大しました。江戸時代の終り頃から昭和の高度経済成長期まで、各時代（江戸時代末期から明治時代初期、明治時代末期から大正時代、昭和初期、昭和40～50年代）のくらしの特徴を、実物の道具を見ながら比較し発見できるコーナーとなっています。

さらに「思い出の写真コーナー」を設置し、来館者の方から寄せられた“ちょっと昔”的写真を紹介することで、来館者の皆さんと一緒に展覧会を作っています。平成28年度(2016)から開始したこのコーナーには、毎年多くの方からご提供を受け、「なつかしい」「こんな風景だった」と昔を思い起こす感想をいただいているます。また、異なる世代の間で、「おじいさんおばあさん（おとうさんおかあさん）の子どものころは…」と話のきっかけを提供しています。

写真是、昭和20年代～50年代初めごろ、岐阜市近辺で撮影されたものを主な対象とし、博物館への持参を原則としています。また写真原本は返却します。今年も募集を行っていますので、ぜひご協力をよろしくお願いいたします。（会期中は随時受付）



思い出の写真コーナー

加えて今年度は、毎年好評をいただいている、なんでも屋商店の営業日数を拡大します。会期中の土曜・日曜・祝日に加え、1月13日(月)以降は平日も、買い物を楽しんでいただくことができます。なつかしいおもちゃが沢山並んだお店は、眺めているだけでも楽しくなります。お気に入りのおもちゃを探してみてはいかがでしょうか。



なんでも屋商店（おもちゃの例）

その他、土曜・日曜・祝日には「昔のおもちゃ作り教室」、「ものしり博士のわくわくワークショップ」や「糸つむぎ＆綿ぐり体験」など、各種のイベントがあります。どのイベントでも講師の先生たちがやさしく丁寧に教えてくださいます。大人の方も参加できますので、ぜひ挑戦してみてください。

世代ごとに様々な見方が味わえる「ちょっと昔」を、ぜひご家族でお楽しみください。



おもちゃ作り教室の作品例



糸つむぎ体験の様子

関連行事

一般来館者向け

● 昔のおもちゃ作り教室

講師:玩具クリエーター ろくさん・森島はるえさん

①「親子でチャレンジ!布で作る花のピンクッション」

12月22日(日) [800円]

②「羽子板ストラップ」

1月5日(日) [300円]

③「折り紙でチャレンジ!自分だけのカブト」

2月2日(日) [300円]

④「うぐいす笛」

3月1日(日) [200円]

※[]は材料費、各回定員先着20名（「親子でチャレンジ!布で作る花のピンクッション」は先着10名）

※①・②は、各日11:00～14:00～。開始30分前より整理券を配布します。

※③・④は、各日10:30～12:00、14:00～15:30。定員まで随時参加できます。

● ものしり博士のわくわくワークショップ

講師:ものしり博士のみなさん

日 時:12月21日、1月4日・18日・25日、2月1日・8日・

15日・29日、3月14日の各土曜日

時間:10:00～12:00と13:00～15:00

※「お手玉づくり」「万華鏡づくり」「おりがみコマ」などを行います。（内容は日によって異なります）

※展覧会観覧者は当日自由にご参加いただけます。

● 糸つむぎ＆綿ぐり体験

講師:ものしり博士のみなさん

日 時:2月22日、3月7日の各土曜日

時間:13:00～15:00

※展覧会観覧者は当日自由にご参加いただけます。

※開始30分前より整理券を配布します。（参加人数によっては早めに受付を終了することがあります。）

学校団体向け

● たぬきの糸車 SPECIAL DAYS

日 時:1月30日(木)・31日(金)、2月13日(木)・14日(金)・27日(木)・28日(金)

※都合により内容・時間等が変更になる場合があります。

※学校団体見学の申し込みは、随時受け付けております。

ご希望の見学日時が満員となる場合もありますので、お早めに博物館までご相談ください。

加藤栄三・東一記念美術館

栄三・東一の愛した 生きものたち

2019.10.8(火)～12.27(金)

生きものをテーマとして描いた作品は「花鳥画」と呼称され、山水画、人物画と並ぶ東洋絵画の一部門として、今まで時代を代表する作家に描かれてきました。

岐阜市出身の日本画家:加藤栄三・東一両画伯も、生きものの魅力に惹かれ、多くの素描(スケッチ)・本画(完成作品)を描きました。

大正13年(1924)、加藤栄三は大阪三越デパートで開催された淡交会第1回展に出品された竹内栖鳳の「斑猫」を見て深い感銘を受けます。この運命的出会いにより、栄三は画家になることを決意します。迫真的描写力で対象に迫ろうとする栄三の制作姿勢に、大きな影響を与えることになったとも言われています。

栄三が日本画家になるきっかけになった作品が「猫」という生きものであったことも興味深いことで、花鳥は郷土岐阜の風物とななり栄三芸術の核心とも言えるのではないかと考えます。



加藤栄三「宵」

栄三作「宵」は軸装であった作品を額装に仕立て直した作品で、カラスウリの花を描いています。夏の夜に縁が糸状に裂けた白い美しい花を開かせるカラスウリを墨の濃淡を使い巧みに表現しています。画面下の方に金を用いて描かれた黄金虫が一匹いることに気づきます。モノトーンの画面に金をあしらった表現で妙味を見せています。小さな命を見逃さない栄三ならではの名作の一つといえます。



加藤東一「夏の小さな生きものたち」

生命の喜びを描く画風は、弟:東一にも受け継がれ、命の尊さを描いた兄:栄三の作品と同じく生命の尊厳を感じることができます。

東一はある対談で「私にとって“絵とは何か”と問うことは、生とは何か、死とは何かということにつながります。生と死はまったくの紙の表裏でしょう、生があれば絶対に死がある。だから逆説的かも知れないけれど、生きる意味は死があって初めて出てくるのではないかでしょうか。」と語っています。

絵というものは形や色を写すばかりでなく、自分の心を写すものだという二人の題材を見つめる純粋な姿勢がうかがえます。

本展では収蔵作品の中から、本画と共に、パステル・墨・水彩などで描いた素描をあわせて展示いたします。

二人の作品から生命の尊さや、すばらしさを再認識していただければと思います。

加藤栄三・東一記念美術館

栄三・東一と ゆかりの画家たち

2020.1.5(日)~4.12(日)

室町時代中期から明治時代中期にわたり続いてきた画派『狩野派』。その繁栄を支えたのは、題材を担当ごとに描き分ける工房のシステムと職人の技量です。ほぼ血縁で受け継がれてきたリーダー絵師の裁量の大きさが御用絵師として時の幕府や諸大名にもてはやされたのではないかと考えます。後にこれらの画派は狩野派を始めほとんどが時代の移り変わりの中で解散を余儀なくされ、画壇を担う人材の育成方法は、江戸時代の終わりが発祥とされる塾制度が主流となり、現在もその形を変えてはいますが引き継がれています。

明治20年(1887)、東京美術学校(現 東京芸術大学)が開校し、明治31年に岡倉天心が東京美術学校の校長を辞任する際に設立した日本美術院による院展、明治40年から始まった官展の系統を引く文部省美術展覧会(現 日展)のような団体公募展が始まり、後進を育成するための研究会と言われる勉強会はそのころから開催されるようになったのではないかと言われています。



「山河生生」 石川 響

研究会を主宰する指導者は、作家であると同時に団体公募展を運営するための要職も兼ねています。これら研究会は、美術大学・芸術大学で教鞭を

とる教授陣が主宰していることが多い、いわば、研究会は大学院のような役割を果たしています。

研究会では卒業生、在校生が大作を描く前に勉強してきたスケッチや資料などを持参し、教授より作品の方向性等について、またはその本画や小下図を見ながら作品の仕上がりについて相談します。



「明日吹く風」 加藤 晋

加藤栄三は東京美術学校日本画科を卒業後、美術学校の指導教授でもあった結城素明に師事し作品作りの勉強を続けました。

加藤東一は同じく東京美術学校卒業後、山口蓬春に師事するとともに、高山辰雄・浦田正夫らを中心とする日本画研究団体「一采社」に参加し制作活動を続けました。敬愛する指導者のもとで日展を中心に作品を発表し頭角を現してゆきます。

栄三・東一の名前が世に知られようになると、二人を慕い、指導を仰ぎたいという若い日本画家が集まってきた。

門下生を拘束することなく、各作家の個性を尊重する指導で多くの日本画家が育ち、次世代の指導者へと成長していきました。

栄三の門下生として長繩士郎、石川響。東一の門下生からは土屋禮一、稻元実、岸野圭作、東俊行、加藤晋といった日展審査員を輩出しています。

本展では、栄三・東一の作品とともに、当館で所蔵している門下生の作品と同時代に日展で活躍した栄三・東一ゆかりの作家の作品を展示します。

岐阜市歴史博物館分室 原三溪記念室

これまでの展示

● 山田省三郎～治水に尽くした三溪の師～ 4月1日(月)～4月11日(木)

山田省三郎(天保13年[1842]～大正5年[1916])は、佐波村(岐阜市柳津)の出身で、明治12年(1879)岐阜県会議員となり、木曽三川治水事業に尽力した人物です。三溪の実家・青木家と山田家はすぐ近くにあり、若き日の三溪(明治元年[1868]～昭和14年[1939])は、尚友義校(現在の小学校に相当する学校)で省三郎から教えを受けました。三溪に影響をあたえたであろう、幼少期の学問の師・山田省三郎の生き様と業績を紹介しました。



山田省三郎像
(岐阜市四ツ屋公園)

● 杏村の花鳥画 4月7日(日)～5月23日(木)

原三溪の祖父・高橋杏村(神戸町出身)は幕末の美濃を代表する南画家であり、杏村の没年に生誕した三溪は祖父の画才をひきつぎ、幼少期から杏村の生まれ変わりという評判がたつほどでした。杏村は数多くの花鳥画を残しており、若き三溪に注目しその結婚をバックアップした跡見花蹊もまた花鳥画の名手でした。三溪の運命を左右したかもしれない杏村の花鳥画に焦点をあてて紹介しました。



「花卉図巻(部分)」高橋杏村筆
(岐阜市歴史博物館蔵)

● 杏村の山水画 5月24日(金)～7月5日(金)

杏村は、特に山水花鳥に優れていると評されました。三溪は杏村の息子・杭水に絵画を学びましたが、杏村の作品に触れる機会も多かったと思われます。三溪の美意識を育んだであろう杏村の作品のうち、山水画に焦点をあてて紹介しました。



「渓山深秀図(部分)」
高橋杏村筆
(岐阜市歴史博物館蔵)

● 歴博コレクション～三溪の書画～ 7月6日(土)～8月16日(金)

三溪は生糸貿易に携わる経済人である一方、古美術の収集家として、また茶人として知られています。また同時に、同時代の画家たちを支援したパトロンであり、自らも絵を描き、漢詩など書作品を残しています。歴史博物館で収集した三溪自筆の絵と書を紹介しました。



「桔梗図(部分)」原三溪筆
(岐阜市歴史博物館蔵)

● 加納鉄哉～古典へのまなざし～ 8月17日(土)～9月27日(金)

加納鉄哉(弘化2年[1845]～大正14年[1925])は、岐阜本町の旧家に生まれ、正倉院や法隆寺の宝物の模造など古典技法の習熟に努め、彫刻や工芸の分野でその才能を発揮しました。同じ時代を生きた三溪も、伝統的な日本美術に关心を向け、鉄哉から譲り受けた茶器などの古美術を茶会に用いています。鉄哉の作品制作の基盤となった、古典への真摯なまなざしを感じさせる作品を紹介しました。



「観音像」加納鉄哉筆
(岐阜市歴史博物館蔵)

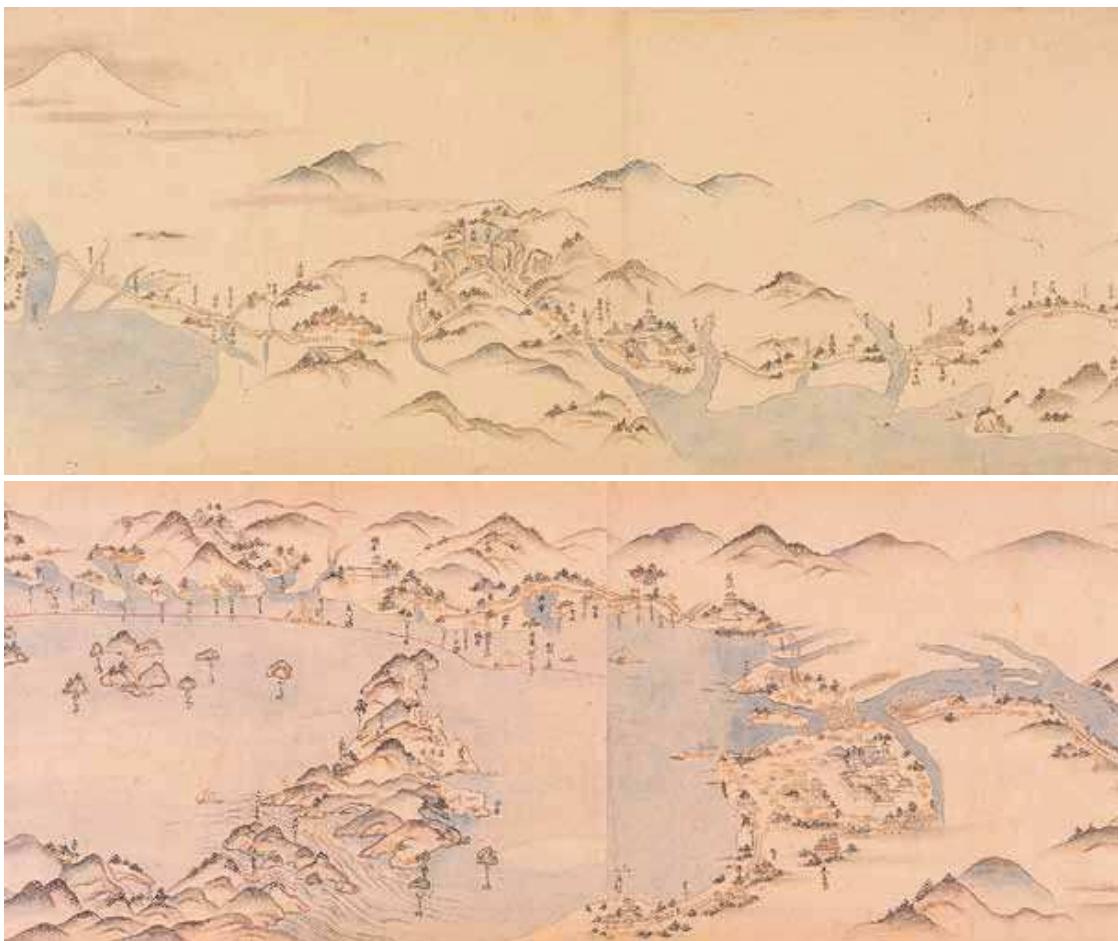
これからの展示

● 濃尾地震と三溪 9月28日(土)～11月8日(金)

● 近代岐阜の名所 11月9日(土)～12月13日(金)

館蔵資料紹介

江戸より長崎街道図卷 紙本著色 寸法:34.8×693.0cm



本図は江戸から五島列島までを描いた街道絵図です。江戸から大坂までは東海道が中心で、東海道以外は、一部の脇往還が描かれるのみです。大坂より西は瀬戸内海の海路が中心で、明石までは中国路(山陽路・西国街道)が描かれているものの、それより西に陸路の描写はありません。九州では再び陸路が登場し、佐賀関や小倉から熊本に至る街道が描かれています。

「江戸より長崎街道図卷」の原図は、寛文12年(1672)ごろに刊行された「東海道駅路図」「西海道駅路図」と考えられます(山本光正『街道絵図の成立と展開』)。「江戸より長崎街道図卷」と原図を見比べると、大きく異なる点として次の4つが挙げられます。

- ①原図は木版刷りだが、「江戸より長崎街道図卷」は肉筆で描かれている。
- ②原図は日暮里・谷中・浅草から始まるのに対して、「江戸より長崎街道図卷」では江戸城から描き始められている。
- ③原図では平塚・江尻・見附・舞坂・気賀・池鯉鮒・垂井宿といった各宿場の名前が省略されているが、「江戸より長崎街道図卷」ではこうした地名が補足されている。その他、上島(家島諸島)や荒神島、唐舟といった、原図にはない瀬戸内海に浮かぶ島々が掲載されている。
- ④原図では瀬戸内海や対馬海峡の航路が波のような形で表現されているのに対し、「江戸より長崎街道図卷」では朱線で航路が示されている。また、原図では、山陽沿岸寄りの航路(地乗り航路)と島々をぬって進む航路(沖乗り航路)が併記されているのに対して、沖乗り航路の一部が省略されている。

同じ原図を基に作製されることもあり、街道絵図はパターン化していく傾向にありますが、その細部には肉筆画ならではのオリジナリティが見られます。交通網が整備され、旅が大衆化していった江戸時代。こうした街道絵図からは、当時の人々の旅への強い憧れを感じることができるでしょう。

休館・休室の御案内

歴史博物館は令和元年9月から令和2年1月にかけて、博物館改修工事および「麒麟がくる 岐阜 大河ドラマ館」開設準備のため下記のとおり休館・休室となります。

- ・令和元年9月24日(火)から令和元年12月16日(月)まで
全館休館
- ・令和元年12月17日(火)から令和2年1月10日(金)まで
1階展示室 企画展「ちょっと昔の道具たち」(令和2年3月15日(日)まで開催)
2階展示室 休室

※令和2年1月11日(土)から令和3年1月11日(月・祝)まで、2階展示室は「麒麟がくる 岐阜 大河ドラマ館」となります。

利用の御案内

■開館時間	午前9時～午後5時 (歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館の入館は午後4時30分まで)
■休館日	毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始(12月28日～1月3日) (月曜日が祝日の場合はその翌日) ※特別展・企画展開催中は変更する事がありますので、ご注意ください。 ※「麒麟がくる 岐阜 大河ドラマ館」開設期間中は年中無休です。
■観覧料	『歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館』 歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館 高校生以上 310円(団体250円)(団体は20人以上) 小中学生 150円(団体90円) 両館共通で観覧される場合 高校生以上 520円(団体410円) 小中学生 260円(団体150円) ◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。 ①岐阜市在住の70歳以上の人 ②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳の交付を受けている人、および その介護の方1人 ③岐阜市内の小中学生 ④家庭の日(毎月第3日曜日)に入館する中学生以下の人と同伴する家族(高校生以上)の方 ◎特別展は、その都度料金を定めます。 ※「麒麟がくる 岐阜 大河ドラマ館」は別料金です。 『原三溪記念室』 観覧料は無料です。
■交通案内	『歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館』 JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。 岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。 『原三溪記念室』 岐阜バス茜部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分 岐阜バス茜部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ

博物館だより No.103 2019.10

編集・発行 岐阜市歴史博物館

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1

☎058(265)0010

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46

☎058(264)6410

(分室) 原三溪記念室

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階

☎058(270)1080